

北海道医療大学学術リポジトリ

超高齢社会と多職種連携型医療

著者	植原 治
雑誌名	北海道医療大学歯学雑誌
巻	33
号	1
ページ	32-32
発行年	2014-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00010185/

[最近のトピックス]

超高齢社会と多職種連携型医療

植原 治

北海道医療大学歯学部口腔構造・機能発育学系保健衛生学分野

少子高齢化の原因は、出生数が減り、一方で平均寿命が延びて高齢者が増えているためであり、日本は世界一の高齢化社会である。第1次ベビーブームの世代が、65歳を超え始めているため高齢化は今後さらに進展する。

2013年の総人口が1億2714万人で老年人口が3199万人であるのに対し、2020年の総人口が1億2411万人で老年人口が3456万人と予測されており、高齢者医療費はさらに高騰すると考えられている。

今後日本が直面する超高齢社会のモデル地域として夕張市があげられる。夕張市は、もともと炭鉱により開かれた街で、石炭産業以外の産業基盤がなかったため雇用の受け皿が少なく、生産年齢人口が激減した。街には高齢者が残る結果となり、少子高齢化が進んだ。その影響もあり、深刻な財政難となり、財政再建団体に指定され、財政破綻した(2007年3月)。最盛期からの夕張市の人口減少率は、全国の自治体でもトップクラスとなった(最盛期の人口:11万人以上、現在の人口:1万人未満)。

財政破綻により夕張市立総合病院は171床の病院から診療所19床に縮小され、救急指定病院ではなくなり地域の救急医療は大きな後退を余儀なくされた。当時、病院に勤務されていた村上智彦医師を中心に予防と在宅医療に重きを置く多職種連携型の医療にシフトした。現在、夕張市立診療所は、財団法人夕張希望の杜(理事長:八田政浩歯科医師、本学歯学部3期生)が運営している。

「肺炎球菌ワクチン接種と口腔ケアの徹底」、「高血圧・糖尿病などの慢性疾患の管理」、「ピロリ菌除菌の徹底」など疾病予防活動を通じて患者を支えた。その結果、多職種連携型の医療にシフトした5年間の推移をみると、悪性新生物、心疾患、脳血管疾患および肺炎の標準化死亡率(SMR)の減少が認められている(図)。SMRとは、基準死亡率(人口10万対の死亡率)を対象地域に当てはめた場合に算出された期待される死亡数と実際の死亡数とを比較するものである。日本の平均は100で、それを上回った場合は死亡率が多く、下回った場合は低いと判断されている。

予防と在宅医療に重きを置き、多職種(医師、歯科医師、薬剤師、看護師、歯科衛生士、理学療法士、作業療法士、介護士、ケアマネージャーなど)の連携で機動力を持たせれば、医師の確保が困難な超高齢社会の進展した地域でも住み続けることが可能で、多職種連携型の医療がQOLを高め、医療経済にも有用であることが明らかとなった。これらの推移から夕張市のような超高齢社会で医療に求められることは、病気と戦う医療ではなく、医療が必要な高齢者の生活を支え、住み慣れた暮らしを継続できるように支援することであるといえる。

超高齢社会の進展した地域において歯科医療も「口腔ケア」の分野で多職種連携型の医療に積極的に参入し、これからの日本の地域医療に普及させなければならない。「口腔ケア」により、誤嚥性肺炎、糖尿病、高血圧などの慢性疾患の増悪をコントロールすることができれば、地域医療の崩壊を防ぐことも可能であると考えられる。

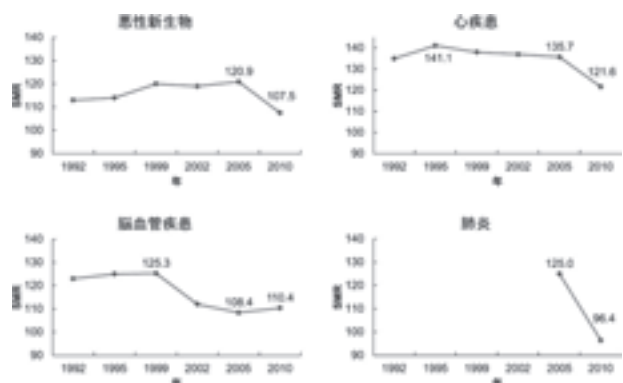


図 夕張市のSMRの推移

参考文献

1. 森田洋之, (5) 救急を受けられない罪悪感を背に - ささえる医療: 救急医療 (前編), 日本医事新報 4606: 29-31, 2012.
2. 森田洋之, (6) 救急を受けられない罪悪感を背に - ささえる医療: 救急医療 (後編), 日本医事新報 4610: 30-32, 2012.